



# 卓 話

人の者が集って五七五七七を50句、100句と連ねて絵巻物のような長大な作品を作るようになり、これを連歌といたしました。この連歌の第一句を”発句”とよび、最後の止めの句を”挙句”といたしました。現在、物ごとの終わりを「挙句の果て」といいますが、その言葉はここから来ているのです。

## 「俳句よもやま話」

寺主 成尚 名誉会員

私が俳句という十七文字の季題の詩に親しむようになってもう45年になります。虚子は”深は新なり”とっていますが、この伝統的短詩のもつ深遠さと新境地の追求に日暮れて道遠しの感一入であります。



俳句を始めた機縁は昭和37年1月私の勤務する会社に顧問として来られた中村春逸さん（本名俊一、富安風生の高弟、故人）が社員の情操教育の一環として俳句の同好会を作ることを奨められたのが始まりです。当時私は人事課長の職にあり、必然的に幹事役を引き受ける羽目になり、社内の希望者を募ったところ忽ち20数名の応募があり、その時期に因んで睦月句会と名づけられて発足しました。私自身はそれまでは短歌の方に興味をもち、学生時代を通じて会津八一、吉井 勇などの歌集を専ら読み、且つ親しんで来たのですが、ひとたび俳句を始め以来それからというものは一筋で今日まで参りました。

幸いにもこれまで睦月句会は選者に恵まれ、中村春逸さん亡きあとは今井つる女さん（虚子の姪—愛媛句壇の選者、故人）、次いで上野章子さん（虚子の六女—前俳誌春潮主宰、元第2590地区ガバナー上野 泰氏夫人、故人）、そして現在の松田美子さん（上野章子さんの長女—現春潮主宰）と続いています。

他方、旧陸軍士官学校、幼年学校出身者で形成する同好会経済懇話会の俳句同好会（同好句会）に当初より参画し、大野雑草子さん（俳句四季のもと編集長）を選者として運営しております。

それと、わがクラブのきさらぎ句会、平成6年2月結成以来すでに14年になります。ワセダRCの同好会員と共に句作を楽しんでいますが、近藤龍観会員をはじめ会員の上達ぶりはめざましいものがあります。

さて、平安時代以後日本の文芸の主流を占めたのは短歌でしたが、一つの歌を上句と下句に分けて2人で創作する遊びがはやり、それが連歌の始まりでやがて数

やがて、この”発句”が現在の俳句の十七文字として独立した形となり”俳諧”となりました。この”俳諧”という言葉は「俳」も「諧」も本来は「おもしろみ」とか「こっけい」という意味をもち、堅苦しい貴族の文学に対して庶民が求める嗜好が中心でありました。その意味ではいまの川柳に近いといえるかもしれませんが、しかし、ここで登場するのが松尾芭蕉であり、またそれを引き継ぐ与謝蕪村といった人たちで、この人たちによって俳諧は短歌に匹敵する芸術性の高い文学に高められたのです。その後出てくる庶民性の高い小林一茶など、これらの人たちは俳諧師であり俳人とはいいません。

明治になって芭蕉の精神を土台に引継ぎ”俳句”として更に芸術性を高めたのが正岡子規で”俳句”という言葉は”俳諧の発句”の「俳」の字と「句」の字をくっつけてできた言葉なのです。その基礎を築いた正岡子規は”写生”ということをして新しい俳句形成の旗印に掲げ、それを受け継いで近代俳句として確立したのが高浜虚子で「主観」を離れ「客観写生」を重視したのです。これが今日伝統俳句といわれているものです。

その型というのは（1）五七五の定型（2）季語は必ず一つ入れる（3）切れ字（や、かな、けり）を活用する、というものです。季語というのは季節の言葉で、四季折々の時候、天文、地理、動物、植物、人事、行事など多岐にわたっていますが、季節を表す言葉であればよいわけです。長い俳句の歴史の中では言いならされて根づいた俳句独特の季語というものが数多くあり、これを有効に活用することが肝要です。勿論これらの季語は歳時記（季寄せ）として網羅されています。

最後に俳句の効用というものを述べますと（1）俳句をやることによって自然への関心が高まる。不断、何となく見過ごしている自然現象、花、鳥、動物などの動きに関心をもつようになる。（日本の国ほど四季に恵まれている国は他にない）（2）日本の伝統行事に関心を抱き、故事来歴を知る。（3）作句にあたり言葉を選ぶことにより、語彙は豊富になり、生活を豊かにすることが

できる。(4)歳時記を一冊用意して、あとは紙と鉛筆があれば何時、どこでも取り組むことができる、などが挙げられます。

今、外国でも日本の俳句に興味をもつ人が次第にふえて、ドイツあたりでは随分盛んになったと聞いています。

私は”感激なき人生は空虚なり”という言葉が好きでこれを座右の銘としていますが、俳句を作るということは自然或いは生活上の様々な事象に対して真正面から向かい合うことで、それには自ずから感動というものが付随して来ます。感動或いは感激の伴わない人生はまさに空虚だといえましょう。俳句は人生を豊かに且つうるおいのあるものにする手近な手段だと思います。